

第9回フォローアップ研修会

房総の自然を極めよう

日 時：11月23日（土）～24日（日） 天気：快晴

場 所：君津亀山少年自然の家と周辺（君津市）

参加者：講師を含め37名 研修会担当：佐藤一枝 田中玉枝 盛一昭代

<11月23日>

鈴木英夫（西東京市）

千葉駅からのバス組は君津ふるさと物産館前で下車。好天に恵まれ、もみじ祭りで大変な人出でしたが、送迎バスで少年の家に参集。少年自然の家職員による施設等の説明を受け、小西代表による開校式、野外の支度をして玄関前に集合しました。

野外講習は2グループに分かれました。

1)「森のガイドハイク」案内人は千葉自然学校スタッフの庄司さん。

少年の家の裏山ハイクです。雑木林とスギの人工林とが明確にわかる場所がありました。棲息する動物はニホンリス、モグラ、シカ。少年の家駐車場近くで残土の盛塚がみられました。イノシシはかなりいるそうです。ヒルはシカのヒヅメにつくということです。マツボックリをリスが食べると素敵な森のエビフライとなります。足元を見るとウサギの糞？ シカの糞？ 植物も注目です。イズセンリョウ、シロダモ、ヤブニッケイ、ヤブムラサキ、フユイチゴ、ツガ、キヨスミギク、コウヤボウキ。イイギリのイイは飯のことで、赤い実の中に小さな種子が沢山ありました。ハウノキの大きな枯葉の人面が何とも愉快でした。コースを歩く中で各自が拾ってきた葉っぱを使ってのゲームで大いに盛り上がりました。

2)「鉄塔ハイキング」案内人は伊藤道男さん。自然の家から清水溪流公園までの鉄塔を巡るハイキングコース。途中までは「森のハイク」と一緒です。モミ、アカガシ、ウラジロガシ、アラカシ、アカマツ、ホオノキ、ヒノキ林と広葉樹、針葉樹が豊かなコースです。両生類、爬虫類も生息し、アカガエル、ヒキガエル、ヤマカガシ、マムシと危険な動物として説明されています。

夜は屋内での座学。活動体験報告が行われました。急遽、自然の家の職員、上地智子さんから「ミツバツツジとキヨスミミツバツツジ」のお話を伺う機会を得ました。

千葉県にはこれらが自生しており、ミツバツツジは君津市の花になっています。山から掘られて人里の庭に移植されたミツバツツジ類を親木として、その苗木で山の自生地を復元することを事業化しましたが、遺伝子の問題があるようです。このあたりのことは千葉日報社から千葉学ブックレットとして出版されています。

活動体験報告は3件でした。

- ①「身近な自然に気づいたマイフィールド」：鈴木俊二さんによる、根戸の森の緻密な定点観察の様子が報告されました。「皆さんはマイフィールドをどれ位の頻度で観察していますか？ 週1回ですか？ 月1回ですか？」と質問されたときはハッとしました。
- ②ネイチャア・フィーリング：藤田浩二さんは、新宿御苑をフィールドとして、毎月1回、日曜日に自然観察会を開催しています。観察会は特別なプログラムがあるわけではなく、五感を使った観察会で、弱視の人は毛が寝ているか、立っているかで、ハクモクレンとコブシを区別するとの報告がありました。
- ③房総半島の池や川にいるカメのお話：報告者は小賀野大一さん。
カメは世界に300種、熱帯、温帯に分布します。千葉県からは12種のカメ類が確認されており種間雑種も見られます。イシガメ×クサガメはイシクサと呼ばれています。

クサガメは外来種の可能性があり、ニホンイシガメは全体が黄色っぽい外観をしていますが減少しています。特定外来生物のアライグマによる淡水性カメによる捕食被害が生じており、四肢欠損など悲惨な話が報告されました。

交流懇親会はアルコールもタバコもない少年の家に相応しいものでした。

<11月24日>

千葉 よし江（船橋市）

フォローアップ研修2日目は、午前中名札の紐の色で3班に別れ、「房総の自然を極めよう」をテーマにして、小櫃川上流片倉ダム園地の清水溪流公園内で行われました。大木淳一氏のテーマは「房総の水、地形、地質、水生生物」。まず参加者に小櫃川フィールドを自由にスケッチさせた後で、人工隧道が何故必要だったのか、地形の様子と特徴、田を潤す水の大切さ、先人たちの苦労や、地殻の成り立ちに話が及びました。大木氏のお得意の分野であり、軽やかな説明に納得しました。

佐野由輝氏は「房総の植生、寸詰まり現象と多様性」。房総独自の森林植生、簡単な植生調査、急峻な斜面での柵や樅の状況について、寸詰まり現象というあまり聞きなれない言葉で説明されました。房総丘陵という独特な風土の中で、それぞれの地域性や気候、環境に適応して生きる多様な植生についての興味深いお話でした。

坂本文雄氏は「房総の特産、紅葉に混じる自然薯の黄葉」。蔓性植物の自然薯について、その植生や君津市での栽培状況などについて、また、ヤマノイモの種類が外国から入ってきて食料として日本に根付いたことをお話しされました。クイズを交えながらそして、茹でムカゴを食べながらの楽しいひと時でした。

午前中はあっという間に過ぎてしまいました。錦秋の君津亀山での観察や経験豊かな講師のお話は興味を引くだけでなく新鮮なもので、観察方法のあり方について示唆に富むものでした。このような貴重な体験がこれからの指導員としての活動の大切な糧になっていくと思います。

午後からは、坂本文雄氏の「垣間見た山村の自然と暮らし60年」。自分が育った地域の歴史を紐解きながら、故郷の変化や、多様な自然についてのお話でした。その中で豊富な天然林や人工林の活用、自然の中で育まれた生活の知恵を活かしていくことなどが印象に残りました。

自然に親しみ、自然について学び、それを守り育てることの大切さをあらためて学びました。そのためには実際に作業に参加し、気軽に体験する場が大切です。そのことが仲間づくりや次のステップに広がっていくと思います。興味のあるお話が多く、指導員同士の情報交換や交流の場になり、視野を広げることができました。まさにレベルアップの2日間になったと思います。



300 万年前の地層調査



ムカゴを試食